

赤穂（あこう）の塩と吉良（きら）の塩

徳川家康が江戸に幕府を開設してからおよそ 100 年、元禄 14（1701）年 3 月 14 日の朝、江戸城内の松の廊下で播州（兵庫県）赤穂藩主、浅野内匠頭長矩（あさのたくみのかみながのり）が幕府高家（こうけ）筆頭、吉良上野介義央（きらこうずけのすけよしひさ）を小太刀で切りつけた「江戸城松の廊下事件」が起きました。その日は朝廷からの使者が五代将軍、徳川綱吉に年賀の答礼を行う儀式の最終日でした。浅野内匠頭は朝廷の使者の接待役、その礼儀作法の指導役が吉良上野介でした。

映画やテレビドラマの「忠臣蔵」ではこの事件の発端は、浅野が吉良に「お世話料」を渡さず、吉良からさまざまな嫌がらせを受けたとされるようですが、実は両者の「塩」を巡る争いが原因になったともいわれています（諸説あります）。

吉良家は足利氏の末裔（まつえい）で、三河吉良（愛知県）の塩田では苦汁（にがり）が少なく良質な饗庭塩（あいばじお）を産出し、江戸の一流町人や有名料理屋などもこの塩を使うなど吉良家の財政はかなり豊かだったそうです。

一方、浅野家は常陸（ひたち）笠間（茨城県）の小藩でしたが、国替えにより赤穂に移ることになりました。山国の大名が海に面した領地に行くに際して藩の経営をどうしたらよいか考えた結果、浅野内匠頭の先代が吉良上野介の先代に頼んで塩の製法を習い、赤穂の塩田の開発に努力しました。その結果、赤穂の塩は品質、味ともに良いと評判になり大阪、京都などで名声を博し、食用以外にも歯磨き用焼塩を開発し、将軍綱吉に献上されるまでになりました。お上御用達の赤穂の塩は江戸でも有名になり、赤穂の塩といえば、むしろ歯磨き用焼塩を意味することになりました。以後、吉良の塩は売れなくなり、浅野家と吉良家の経済対立が次第に深まることになります。

吉良家は浅野家の赤穂の塩が売れなくなるように数々の妨害を行い、その妨害行為の恨みが「江戸城松の廊下事件」を引き起こしたといわれます。

浅野内匠頭は即日切腹の裁きとなり、翌元禄 15 年 12 月 14 日に赤穂浪士の吉良邸討入り事件が起きました。仇（あだ）討ちの指導者は赤穂藩筆頭家老の大石内蔵助（おおいしくらのすけ）であり赤穂の塩の販売責任者でもありました。

実は仇討ちに参加した赤穂浪士の堀部安兵衛（ほりべやすべえ）、大高源五（おおたかげんご）はそれぞれ、当時歯磨き粉を処方する江戸の歯科医（口中医）や入れ歯師の立て看板を書いていた記録が残ります。食用以外にも歯磨き粉として良質の塩の普及に努めた赤穂藩。赤穂浪士四十七士も自ら歯の大切さを知っていたのかもしれない。

赤穂の塩田は浅野家断絶の後も引き継がれ、開拓が進められました。こうして塩づくりの技術は瀬戸内海沿岸を中心に各地へ伝えられていくことになりました。



口中医（歯科医）兼康祐元（かねやすゆうげん）の看板（右、左下）

浪士、堀部安兵衛作

入れ歯師小野玄入（おのげんにゆう）の看板（左上）

浪士、大高源五作

いずれも歯磨き粉として赤穂の塩を販売していました

（参考）小林富次郎著 よはい草 小林商店 （1928～31）



赤穂浪士四十七士石像（安中市東上秋間岩戸）

桐生から車でおよそ1時間10分、安中市の北西、東上秋間の岩戸山には浪士、片岡源五右衛門（かたおかげんごえもん）の忠僕、元助（もとすけ）が出身地であるこの地に浅野内匠頭夫妻と四十七士の供養のために20年の歳月をかけ建立した47の石像が存在します。

【歯科口腔外科診療部長 今井 正之】

